ドイツさんと久留米 第3回

ドイツさんの日常生活

収容所の下士卒用バラックの内部（以下、写真は全て久留米市教育委員会所蔵）

・収容所の住環境

統合された新しい久留米収容所は、衛戍病院の臨時病棟を再整備したものです。板塀で囲まれた敷地は、約 31,000 ㎡（久留米球場グラウンド 2.5 個分）。将校用のバラック 2 棟と同食堂 1 棟、下士卒のバラック 15 棟と事務所や食堂、台所、洗濯場、洗面所などの木造バラックが密集しています。建物自体も日本人向けに造られていたため、体格の大きいドイツ兵たちには全てが小さく、かなり窮屈で不満も大きかったようです。収容所側も「戦時臨時の構築物である急造病舎なので、経年とともに破損が次々に発生し、常に応急修理が必要で、あるいは冬場の暖房設備がなく、または、便所の構造が不完全で居室に接近していることなどは、常に不平の種となった」（「大正三年乃至九年戦役俘虜取扱顛末」を現代語訳）と、居住環境の悪さを認めています。

将校には部屋が与えられましたが、下士卒のバラックでは長さ 55m、幅 7.2mの空間に 8 0 人が詰めこまれています。これではベッドと物入れを置く程度のスペースしかありません。もちろん隣人との間には仕切りがなく、厳しいストレスに曝される日々でした。

「どうか一時間だけでもひとりになれないだろうか。すべての人々から離れて」

（「フィッシャー回想録」生熊文訳）

所内の広場やプロムナード（散歩道）散策は生活の一部

・捕虜の一日

熊本収容所から久留米収容所に移ってきたばかりのエーリッヒ・フィッシャーの日記には、大正４年（1915）６月 17 日の項で、久留米収容所での一日が描かれています。

「早朝６時、『広場』でシグナルを四回鳴らす日本の衛兵所のラッパで起床、まもなく歩哨がやって来て、まだ寝床でウナギみたいに寝ている人間にも、いやというほどはっきり起床時刻だと分からせる。７時にまたラッパが鳴り、今度は閲兵だ。全員いるかどうかバラックの長老が確かめて、日本人から命令権を与えられている最年長の准士官に伝えに行く。次にラッパが鳴るのは７時半だ。コーヒーを取りにいく（中略）。ラッパは９時にもう一度鳴る。一般兵卒はジャガイモの皮むきや労働勤務に就かなければならない。その後 12 時まで三時間ほど、反吐をもよおすこのラッパから解放される。12 時に食事当番が食事を取りにいく。ここの食事はまったく申し分なく、変化に富んで良く調理され、量も十分ある。ただ、肉とジャガイモばかりなので野菜が少ない。夕食には時々卵が出る。夕方６時にまたラッパで邪魔される。総合点呼で、これは日本人将校が行う。全員バラックの前に整列しなければならない。午後６時半が夕食だ。一般兵卒は９時、僕ら下士官は 10 時、将校は 11 時頃就寝しなければならない。」（「フィッシャー回想録」生熊文訳）

一見、単調な毎日のようにも見えますが、収容所側の報告からは、捕虜それぞれが心身の健康に留意し、解放に向けての希望を胸に日々を過ごしている様子がわかります。「雨が降らない限りどのような天候でも戸外に出て運動し、なすことなくバラック内のベッドで横になっている者は少ない。例えバラック内にいる時も、語学や数学その他の勉強に励み、その努力は驚くべきものだ」（「欧受大日記」を現代語訳）。

・日々の楽しみ

生きていく上で不可欠な食事は、捕虜たちも楽しみの一つ。将校たちは日本政府からの

母からの仕送りの包みに入っている食べ物は最大の楽しみ

給料で食事や食料を買い求め、下士卒には給食的な賄いがありました。収容当初は付近の料理店が食事を請け負っていましたが、日本人の料理は捕虜の口には合わず。食事への不満を口にする者が少なくありませんでした。そのため収容所開設の１ヶ月後には、コック経験者が担当となって自炊を開始しました。先のフィッシャー回想録にもあるように、味もボリュームも大いに改善されたようです。ただし、大量のジャガイモの皮むき等の下ごしらえは兵士の当番制で、作業を手伝おうとしない下士官との間にトラブルも発生。

食事以外では、故郷からの手紙や小包が何よりの喜びで慰めとなったようです。ただし、発信数の制限や検閲がありました。大量に送られてきた場合は検閲に時間がかかり、捕虜の手元になかなか届かないこともあったようです。面会は週に一度、30 分間が認められており、日本や中国在住の家族や知人たちが訪ねてきました。将校の婦人７名は、子供らとともに久留米収容所近くの借家に移り住んで、面会に通いました。

単調な日々が続く収容所生活を彩るために、植物の栽培や鳥の飼育も盛んでした。ヘチマ等は夏の暑さを凌ぐグリーンカーテンになります。家鳩に至っては、当初４羽だったのが、３年後には約 500 羽に急増しています。時に家鳩は食用にもなりました。鳩の他には、鴨やカナリヤ、文鳥などが飼育されていました。これは、ペットによる癒しを捕虜たちが求めていたからでしょう。

「ここで耐え難いことは単調さだ。木塀以外見る物がない。いつも同じ人間ばかり。木塀の向こうの木が数本とずっと遠くの丘陵だ。」（「フィッシャー回想録」生熊文訳）。

企画制作　久留米市 市民文化部文化財保護課・総合政策部広報戦略課
令和元年（2019）11 月 15 日　発行